

研究ノート

韓国の絵本の中の図書館

—絵本に描かれる図書館3—

Libraries on Korean Picture Books

Libraries on Picture Books 3

村主千賀*

Chika MURANUSHI

キーワード：絵本、図書館、司書、利用者

Key Words : picture book, library, librarian, library user, Korea

要約

本研究は図書館が描かれている韓国の絵本に焦点をあてた。図書館や図書館員のあり方、図書館リテラシーやマナーの描写について考察し、いくつかの特徴を見出した。加えて翻訳された絵本の傾向についても言及した。

Abstract

The focus of this study is Korean picture books relating to libraries or librarians. The aim of the study is to examine the depiction of libraries, librarians, library literacy and manner in books. Some salient points are identified in original Korean picture books and picture books translated into Korean.

1 研究の背景と研究計画

本研究は、「絵本に描かれる図書館」(村主 2017) の継続研究に位置づけられる。絵本のターゲットとする読者層の中心は子どもであり、絵本は図書館や本と出会う初期の段階で手にする情報メディアである。そのため、子どもたちが読書習慣を身につけるだけでなく、本に触れ合いながら、図書館とはどのようなところか、図書館リテラシーやマナーを伝えるために、絵本は有用なメディアであると位置付けられる。

これまで、日本で出版された絵本を、日本語で描かれたもの、日本語に翻訳されたものを中心

* 東海学園大学人文学部人文学科

に調査を進めてきた(村主 2017, 2018)。そこでは、図書館を伝えるために描かれたものか、お話の舞台のためだけに登場するのかなど、絵本における図書館や図書館員の扱われ方を整理し、図書館の構成要素を軸にどのように描かれているかを論じた。

村主(2017, 2018)では、英語で書かれた絵本または翻訳絵本、日本語のオリジナル絵本を収集、調査に用いてきたが、今回は、アジア圏へ視点を移し韓国の絵本に注目する。

韓国の子どもの本に対する捉え方については、前著(村主 2014)においてブックフェアでの扱いを中心に報告している。韓国は、子どもの読書活動の推進に関心が高い。特に1990年代以降、読書の重要性に関心が集まり、2006年の「読書文化振興法」の制定といった政策面をはじめ、各地の図書館の多様で活発な活動、読書運動などが展開されてきた(阿部 2010)。社会全体を見ても、坡州市の出版団地(과주 출판도시)の活発な活動^(注1)、大手チェーンに属さず、運営者各自のコンセプトを打ち出した独立系書店の開業ブーム(内沼 2017, 서울도서관 2017)や、ソウル市内の大規模モール内に별마당 도서관(星の庭図書館)^(注2)が開館するなど、本への関心が強いことがうかがえる。また、2018年の8月には韓国政府が全学校への司書教師^(注3)または司書の1名以上の配置を義務化する案を明らかにした。これは生徒1000名に対して1名配置するという案への反発をうけてのことである。電子新聞サイトでは、「すべての学校図書館には専門人材が必要だ」との横断幕を掲げての市民運動も報告されている(연합뉴스 2018)。日本においても、「学校図書館司書モデルプログラム」など、学校図書館司書の必要性が認識され配置が進むなど、子どもの図書館環境への関心には共通点がある。これらのことから、今回韓国の絵本に注目した。

韓国の図書館に関する絵本情報については、NAVER 책의検索から得た。NAVER 책では主に8つの通信販売サイトの販売書誌を横断検索できる。絵本は主題分類されないこと、責任表示で著作の役割に「그림(絵)」と入っているものはヒットするなど、図書館目録での検索は難しいためである。また、日本語の絵本検索でも見られたが「図書館」をシリーズ名に用いることがある。実際に韓国国立こども青少年図書館の目録検索では、「幸福図書館」という絵本シリーズのため、検索ノイズが多量に含まれてしまうことを確認している。したがってNAVER 책において形態が絵本であること、主題が図書館であることをもとめる意図で検索した。検索語「그림책 도서관(絵本 図書館)」による検索結果から、図書館が描かれている絵本、図書館を主題とする絵本を主にタイトルより判別し抽出した。販売書誌を対象にしたのは、書影、入手可能性と、書評、詳細な内容紹介への期待からである。また絵本であるので、表紙を変更することはまずないと考え、英語からの翻訳など既知の絵本も書影で判断できる。それ以外は、検索結果の上位よりタイトルや紹介文中に「図書館」とあるものを一つずつ拾っていく作業を行った。その中で、著者表示に文の担当者、絵の担当者と明記してあるものでも、国立中央図書館の目録で正確な書誌情報をあたると一般図書扱いであり、絵は挿絵程度で本文が100ページ以上あるなど、絵本ではないものも多く含まれた。検索結果上位にあるものから、入手可能性を考慮し、市場にあり誰でもすぐに

入手可能な状態のものから収集した。今回は特にその中から韓国オリジナルのハングルで書かれた絵本を対象とした(表1)。これらについて図書館の要素、描かれ方、リテラシーやマナーについて考察する。また日本語で描かれた絵本を原作とするもの1点を対象とし、翻訳の過程で表現が異なる点を論じた。

表1 調査対象とした絵本

| | タイトル(タイトル訳) | 文 | 絵 | 出版年 | 出版者 |
|---|------------------------------------|---------------|-------|------|-----------|
| 1 | 재미있는 도서관 (楽しい図書館) | 서영선 | 조선경 | 2008 | 조선경 |
| 2 | 도서관에 가는 날 (図書館へ行く日) | 남미영 | 김현 | 2014 | 스마트베어 |
| 3 | 도서관 아이(としょかんぼうや) | 채인선 | 배현주 | 2010 | 한울림 어린이 |
| 4 | 하늘이의 도서관 탐험기 (하늘의図書館探検記) | 석춘유치원 친구들 | 석춘유치원 | 2018 | 하움출판사 |
| 5 | 도서관에서 만난 해리 (図書館であった해리) | 곽영미 | 박선희 | 2016 | 숨쉬는 공장 |
| 6 | 도서관 할아버지 (図書館爺さん) | 최지혜 | 엄정원 | 2014 | 고래가숨쉬는도서관 |
| 7 | 도서관 탐구 생활(図書館探究生活) 邦題 としょかんへいこう | 김숙 訳 斉藤洋原著 | 田中六大 | 2016 | 북뱅크 |

2 絵本の中の図書

2.1 図書館で働く人

図書館業務につく登場人物として図書館長、ボランティア、司書のほか、絵として描かれていないが、文章で“本を読んでくれるおばあさん”と表現される読み聞かせをする人物がいる。男性司書も絵の中に描かれてはいるが女性の司書が多い。『도서관 아이』(3)に登場する館長は年配の女性である。『도서관에서 만난 해리』(5)で野良猫を保護した司書も女性である。また、(3)の絵本では、図書館で開館準備から継続して働くボランティアも女性であった。表現として 자원봉사는そのまま「自願 奉仕」と表すことができ、通常ボランティアと訳される。(3)のボランティアが司書や司書教師の資格があるかは明記されていない。このボランティアの女性は、出産を経て、子どもを同伴出勤し育児をしながら図書館業務を続けていく。

対象とした絵本においては司書について「사서성생(司書先生)」「사서성생님(司書先生様)」と表記され、会話でもそのように呼ばれている。絵本(5)は猫の視点で描かれているが、猫の会話でも「사서성생님」と呼ばれている。また、『도서관 탐구생활』(7)について、日本語原著『としょ

かんへいこう』では「かかりのひと」「としょかんのひと」「カウンター」(カウンターの人を指している)と表現される図書館業務の従事者が、翻訳ではすべて사서성생님(司書先生様)となっている。しかし、先生と呼ばれているからといって、必ずしも司書教師というわけではない。『としょかんへいこう』は公共図書館を舞台にしているのだから、学校以外でも司書は司書先生様と呼ばれることがわかる。つまり、司書は敬称として先生、先生様を付けて表現されるということである。韓国では、身内であっても他人であっても目上、上司、専門職に関しては常に敬語を使うためである。

また(3)『도서관 아이』で「司書のお姉さん」と呼ばれる例があるが、これは対象とした絵本中1例のみであった。図書館の中で育てられた子どもからの呼称で、文字通りその子にとってはお姉さんのような存在であるため、そのように呼ばれていると考えられる。

2.2 図書館リテラシーとマナー

本の貸借について、主人公が初めて本を借りるシーンを描くことで説明する絵本は、これまで見てきた中に数多くある。今回調査している絵本の中では、本嫌い、図書館なんて!というまったく図書館に興味のない子どもが図書館を知るうちに、「図書館で本を借りるにはどうしたらいいか」という問いを発するものがある。『하늘이의 도서관 탐험기』(4)では、本の中から出てきたライオンが図書館を案内するが、ライオンは「司書先生に聞いてみよう」と司書との対話を促す。図書館の貸出方法のレクチャーは、司書との対話ではなく、見開きページにチャートで表現され①会員カード作成、②読みたい本の検索、③書架探索、④カウンターでの手続き、⑤貸出、⑥返却となっている。貸出方法が分かったところで、主人公は「カードがない」となるが、実際には主人公がカードを作って登録する過程は省かれ、ライオンの魔法でカードが出てくる。自分で登録をできない未就学児童等を想定すると、父母が利用者登録を行うので図書カードの作成過程は、子どもにとって重要でないためであろう。

本を乱暴に扱う、大きな声を出すことなど、一般的な図書館マナーについて、たとえば、『재미있는 도서관』(1)では兄弟で図書館に訪れ、自分の家でふるまうようにやんちゃする弟の姿を通じて表している。兄は、弟をたしなめながら、恥ずかしい気持ちになると描くことで、図書館マナーを示している。また、『도서관에 가는 날』(2)は動物達を主人公にしているが、熊のコムドリ君は、一緒に読みたがる友だちに新着図書を見せようとしなかったり、読書を休憩するときもコムドリ君が本を持ったままであったりする姿が描かれる。このことで新着図書を独占するという姿を批判的に描いている。図書館の本は「みんなの本」であるため、分かち合って使うものであり、利用しない場合は迅速に次の人の利用にまわすべきであることを示している。

2.3 図書館はどういうところか

2.3.1 図書館で何ができるか

韓国の原著の絵本 (1) ~ (4) には、本を借りることができる、読み聞かせがある、展示がある、という図書館を舞台とした絵本にはよく見られる図書館利用が描かれているが、他に、(1) や (4) の絵本では売店、カフェがはっきりと描かれている。そして、本を利用する場所とは区別されているが、子どもたちがカフェや売店を積極的に活用している姿が描かれる。

また多様な行事のあることも描かれている。『도서관에서 만난 해리』(5) では、猫の保護に関するお話が中心であり図書館の機能などについては、本文では直接触れてない。しかし、絵の中に「책 큰 잔치 (本の大きな宴)」の横断幕が掲げられており、大きなイベントが開催されることがうかがえる。また、『하늘이의 도서관 탐험기』(4) では音楽会の開催、本を作る参加型ワークショップも描かれている。「本を利用する」だけではない図書館の姿である。

2.3.2 読書の入り口

『하늘이의 도서관 탐험기』(4) では図書館がどういうところかを知ることから、読書の楽しみを知るという過程が描かれている。本を読むことが大嫌いな7歳の主人公が、無理やり「読まされた」本の中から出てきたライオンによって、図書館へ連れて行かれるお話である。本を読むことは退屈すぎる、その理由は「文字が多くて、何の話かもわからない」からである。小学1年生にとっては、ゲームやTVを見ることの方が、よっぽど面白いというのである。本を読まねばならぬ理由も言わず「ちょっと本を読みなさい」という小言を繰り返す母親をまるで怪物のようだとさえ言う。ただ、「本を読め」というのでは、まったく子どもには通じない。本から出てきたライオンに案内され、「お話を聞かせてくれるおばあさん」の存在を知るや、「本は読まなくてもいいの？」という驚き、聞くことからお話の世界の魅力に惹かれていく。図書館展示では、主人公たちの面白い姿にワクワクもする。頭ごなしに「本を読め」というのではなく、読み聞かせ、図書館展示など「お話」の世界への入り口は多様であることがわかる。

また「本」への親しみ方として「読む」のではなく「作る」機会を提供する方法がある。絵本の中では工作のワークショップのほか、出版の実際を簡略的に紹介している。本を読むために図書館へというアプローチではなく、図書館を知る、本を知ることから読書の楽しみに結びつけている。

図書館は「いろいろな本がたくさんあるところ」「本を借りるところ」という前提から始まるお話は多いが、「本なんか見たくない」という子にとっては、「読まない」というアプローチから始まるお話は、まさに読み聞かせにもってこいであろう。

2.3.3 公共施設としての図書館のとらえ方

先行研究で言及しているが、図書館が公共の場であるという前提から、他者に迷惑をかけないというようなマナー面や、仲良く分かち合うという姿勢がよく描かれる。また利用者が集合している場面では障害者や多様な肌の色の子どもが描かれ、平等や公平な図書館利用が描かれていることもあった。そのような「公共」であり「だれでも利用できる」ということに対して、今回調査した絵本のうち『재미있는 도서관』(1)では、「なぜ図書館も本も無料で誰でも利用できるの?」という疑問が子どもから発せられる。それに対する父親の答えは「お父さん、お母さんが収めた税金でできているから」というものである。そこで主人公は「本も図書館も私たちのものだから、もっと大切にしくっちゃ」という考えを持つようになる。

「우리 것 (私たちのもの)」という視点は、「公共」とはどういうことかということに、一つの答えを示すものであろう。우리는「私たち」とも、「私」とも訳すことができる。우りに込められる意味と感情は非常に深く複雑であるとも言われるが、「共有」を自分に引きつけて「それ」を持つ当事者になる発想としてとらえると、公共図書館は皆のものであり、私のものである、ということである。読者の年齢によっては、税金を納めるというのは理解が難しいが、「父母が納める」という表現で、十分に図書館の成り立ちに家族の関わりを感じることができるであろう。

なお、この絵本は『즐거운 사회탐구 : 사회와 놀자 (楽しい社会探求 : 社会と遊ぼう)』シリーズの『사회 문화 (社会文化)』編の『7. 공공시설 (公共施設) : 재미있는 도서관 (面白い図書館)』と題されており、社会における図書館とはどういうものかという立場から描いているものである。主人公は未就学の兄弟がいる程度の小学生であることから、その世代を対象に描かれたものである。

2.3.4 「場」としての図書館：対人コミュニケーションの能力を育てる場

『도서관에 가는 날』(2)では、新着図書を独り占めする子ども（絵本中では小熊のコムドリ）と見せてもらえない他の子たちと、その後の図書館内での双方の振る舞いが描かれる。新着図書を見せてもらえなかった子らは読み聞かせに参加することにするが、逆に後で読み聞かせに興味を示すコムドリ君に対して「一人で読むのが好きでしょ」などと反応したりもする。最終的にはコムドリ君は謝り、ほかの子らは受け入れ一緒に読み聞かせを聞き、独り占めされた本も一緒に見ようということになる。「一人で見るより、一緒に読む方が、もっと楽しいね」という言葉でお話は終わるが、裏表紙には「一緒に読むとなぜもっと面白いのか?」という呼びかけとコムドリ君と仲間と一緒に読む姿が描かれている。図書館マナーが描かれる前提は、図書館は「公共の場」であり、本は「共有」であるということである。この絵本ではさらに、「楽しさを分かち合う場」として強調することで図書館が「対人コミュニケーション能力の育成の場」となっている。

巻末に「両親へのガイド」があり、「対人関係能力は幸せと成功の鍵になる」と題されている。

絵本に描かれた図書館での出来事を通して、友人の多い子になるようにという意図から描かれていることがわかる。この絵本にはさらに読後の「親子の会話問答集」まで用意されている。韓国では子どもの読書に関して、読み聞かせを大事にしていることを前著（村主 2014）でも指摘したが、この絵本は子どもが絵本を楽しむだけでなく、両親への子育てのヒントまで合わせ持つものである。

2.3.5 女性と子どもの場所

「子ども図書館」を舞台にした『도서관 아이』(3)では、前述したように、女性が図書館業務に従事しながら、図書館内で子育てをする姿が描かれている。子どもの泣き声やはしゃぐ声は、独立したこども図書館、または一般の公共図書館では「児童コーナー」の中だけのものである。子どもは守られつつ、ある意味騒音の元として隔離されているとさえ言えよう。しかしこの図書館では館長をはじめ司書、ときには利用者（子どもも大人も）が「子育てを支援しながら」そこにいる。図書館で働くということ、図書館で育つということ、図書館が育てるということ、関わる全ての人について非常にポジティブな姿勢が見られる。絵本の中の世界ではあるが「子ども図書館」の理想的な姿ではないか。そして「そんなのは理想」「絵空事」という感想よりも、「こんなふうに子育てしたい」「こんな子に育てたい」という感想が寄せられていること、幼児教育に関する各種団体の推薦や受賞作であることから、このような図書館のあり方を社会が好意的に捉えていることがわかる。

このお話は紹介文によれば、作家の채인선氏が実際に、ある마을(村)の図書館で도서관 아이(としょかんぼうや)に出会ったことから、図書館の大切さを伝えるために書くことになったとされている。どの程度実話に則しているかは確認できなかったが、母親である作家の目を通して図書館の大切さを伝える童話であると紹介されている。

図書館のボランティアについては、公共図書館に限ってではあるが、ボランティアの活用を積極的に、体系的に行おうという動きはある。また、韓国でも日本と同様に、司書としての正規雇用は公務員試験を通過することが必要であり簡単ではない。

2.3.6 本の世界を超えた活動

『도서관에서 만난 해리』(5)は図書館で保護された猫をモチーフに創作された猫視点のお話であるが、巻末には実際にあったアムサ図書館での保護猫活動を紹介している。アムサ図書館があるカンドン区では野良猫への餌と寝る場所の提供、避妊手術の実施などを行うことで、動物と人間の共生を目指している。さらに、アムサ図書館の司書たちは猫の保護だけでなく、これをきっかけに遺棄動物への関心を持ち、図書館利用者に対しても広報を行っていることを伝えている。このことで、アムサ図書館は本を読むだけの空間ではなく、生命の大切さを学びながら、動物と

の共生を知る場所となっていることが解説されている。猫の視点から「図書館という居場所」を描くことで、そのことが表現されている。

2.4 図書館に貢献した人

『도서관 할아버지』(6)では、子どもたちのために図書館を作った이인표(イ・インピョ)氏の活動が語られる。子ども図書館が韓国国内にまだあまりなかった時代に、特に生活の苦しい子どもたちのために、財団をつくり各地に子ども図書館を作り運営した実話である。イ・インピョ氏は製靴事業で成功をおさめた人物であるが、後継者の代になって事業が傾き、ほとんどの子ども図書館も閉館、現在韓国国内地図で確認できるのは2館のみである。ホームページもあるが更新されておらず、活発な活動は見られない。しかし、現在活動がないとはいえ子どもにとって本と触れ合う生活の価値、図書館の必要性をただ言葉にするのではなく、行動で示してきたその活動は偉大である。こういった図書館活動に関連した伝記的な絵本は、残念ながら日本には見られない。

3 翻訳絵本の傾向

販売書誌では原著者名のハングル表記しかなく、原著者名の下綴の特定が難しいものや、タイトルを意識してつけており、原著作そのものの探索の難しいものがあった。翻訳絵本には、原作が日本のものも数点あった。日本で翻訳が出版されているものと共通する翻訳絵本が数多くみられたが、一方で日本では翻訳が出ていないものもあった。日本でよく読まれている図書館が登場する絵本はほとんどが英語からの翻訳であるのに対し、韓国では台湾、日本といったアジア圏の絵本の翻訳があった。日本において韓国語(朝鮮語)の原著作品の翻訳は、現在までの調査で見当たらない。唯一、英語で描かれた絵本の翻訳ではあるが「きんぎょ」(ユ 2009)は韓国系作家によるものである。ただし、この絵本の韓国語(朝鮮語)訳は韓国国立中央図書館、韓国国立子ども青少年図書館の蔵書目録では確認できなかった。

日本語の原著で「図書館へ行こう」(赤木 2007)のシリーズは日本で出版されてすぐの2008年に翻訳が出版されており(아카기 2008)、学校教育での図書館教材へのニーズの高さがうかがえる。図書館にぬいぐるみをあずけて夜の図書館をぬいぐるみが探検するというイベントがあるが^(注4)、それを主題にした『ぬいぐるみおとまりかい』(風木 2014)も『도서관에서 만나요』(카제키, 김소연訳 2015)として紹介されている。

図書館のマナーやリテラシー、図書館に関する知識を伝えることを意図するもののほかに図書館を舞台にしたお話の翻訳も多い。さらにトーマス・ジェファーソンとその蔵書について描かれた『Thomas Jefferson Builds Library』(Rosenstock 2013)やアレクサンドリア図書館を含む研究機関であるムセイオンの館長を務めたエラトステネスを描いた『Librarian Who Measured the

Earth』(Lasky 1994)のように、図書館に関連する偉人伝なども翻訳されている。

4 まとめ

図書館という「場」を利用という視点から見るのではなく、公共施設とはどのようなものかという解説のための素材、図書館と子育てとの関わり、こどものコミュニケーション能力を育む場として取り上げられているものがあることを見出した。

また、韓国原作の絵本にも翻訳絵本にも図書館に関わる偉人を取り上げていることや、図書館での子育てなど、「人」に注目する姿勢が見られた。そして必ず司書に対して「先生様」の継承をつけて表現するなど専門職に従事している人に対する敬意も見られた。

以上の他に巻末の読み聞かせガイドをはじめとして、絵本自身の構成や、絵柄などにも日韓での差異を確認できた。今後はこれらも含め総合的に図書館絵本の特徴を探求する計画である。

文献リスト

Lasky, Kathryn, Hawkes, Kevin 1994. Librarian Who Measured the Earth.

Little, Brown Books for Young Readers, 48p. 韓国語訳：임후성 (訳), 2005.

지구 둘레를 잴 도서관 사서. 미래 M&B. 48p.

Rosenstock, Barb, O'Brien, John, 2013. Thomas Jefferson builds a library. Calkins Greek, 32p. 韓国語翻

訳：이혜선 (訳), 2014. 토머스 제퍼슨, 도서관을 짓다. 봄나무. 32p.

赤木かん子, すがわらけいこ, 2007. 図書館へ行こう. ポプラ社. 全3巻.

아카기간코, 스가와라게이코, 고향옥 (訳) 도서관에 가자. 달리. 全3巻.

阿部健太郎, 2010. 韓国の読書推進活動—国の政策と図書館の活動. カレントアウェアネス, CA1705, p.4-6

内沼晋太郎, 2017. 本の未来を探す旅 ソウル. 朝日出版社. 224p.

風木一人, 岡田千晶, 2014. ぬいぐるみおとまりかい. 岩崎書店. (ページ付けなし、1冊)

카제키카즈히토, 오카다치아키, 김소연 (訳), 2015. 도서관에서 만나요. 천개의바람, 40p. (韓国語訳絵本タイトルの訳：図書館であいましょう)

서울도서관, 2017. 책방산책:서울 (書房散歩:ソウル). 서울도서관, 270p.

村主千賀, 2014. 情報メディアとしての本：ハングルで書かれた子どもの本と電子書籍を通して. 東海学園大学研究紀要人文科編, 19, p.195-202

村主千賀, 2017. 絵本に描かれる図書館. 東海学園大学研究紀要, 22, p.91-106.

村主千賀, 2018. 絵本の中の図書館リテラシーとマナー：絵本に描かれる図書館 2. 東海学園大学研究紀要人文科学編, 23, p.107-120.

ユテウン, 木坂涼 (訳), 2009. きんぎょ. セーラー出版. (ページ付けなし、1冊)

연합뉴스. 2018 月 8 月 14 日の記事 「すべての学校図書館へ司書教師、司書一名以上義務配置」

<http://www.yonhapnews.co.kr/>

注

注1 出版都市文化財団では、こどもの日にあわせて「어린이 책자치」(子どもの本の宴)や秋には「북소리」(本の声)、作家を招き定期的に開かれる「출판도시 인문학당」(出版都市 人文学堂)など多様な行事を継続して行っている。

<http://www.pajubookcity.org/Culture/CultureMain?BoardClsfCd=Children>

注2 별마당 도서관(星の庭図書館)は、2017年に江南区三成洞にあるCOEXモール内にオープンした図書館。蔵書は約5万冊に及び、趣味、実用書、外国語書籍・雑誌、電子書籍閲覧コーナーがある。誰でも入場でき利用は無料であるが、利用方法は閲覧のみ。

注3 司書教師(사서교사)は日本の司書教諭にあたる。韓国の一般的な教師と同様に、教師の資格を保有しており、教育部(교육부 日本の文部科学省にあたる)の長官に任用権がある国家公務員である。司書は司書資格を保有している人材で市・道教育監に任命権がある。

注4 2006年ごろアメリカで始まった図書館イベント。日本でもこのイベントを行う図書館が報告されている。E1912-ぬいぐるみお泊まり会：読書活動の促進と効果の持続性
カレントアウェアネス-E No.325 2017.05.25